

# 巡礼の比較史

「歩く」経験と宗教

9:55 開会

開会あいさつ

角田 佑一

上智大学神学部准教授/上智大学キリスト教文化研究所所長

① 10:00～11:00

「歩く」巡礼者と受容・排除する地域社会  
—四国遍路の近世・近現代—

大本 敬久 愛媛大学地域協働推進機構特定准教授

② 11:05～12:05

近世・近代ピレネにおける「聖母出現」領域と  
巡礼インフラの形成 —ルルドができるまで—

坂野 正則 上智大学文学部教授/上智大学キリスト教文化研究所所員

③ 13:30～14:30

静かな変革運動としての巡礼 —信教と移動の自由をめぐる—

門田 岳久 立教大学観光学部教授

④ 14:35～15:35

神なき巡礼の交差点 —歩くことだけが残された世界で—

岡本 亮輔 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院教授

⑤ 15:50～17:20

シンポジウム

モデレーター 北條 勝貴 上智大学文学部教授/上智大学キリスト教文化研究所所員

【共催】上智大学キリスト教文化研究所/上智大学学術研究特別推進費  
「歴史的ヨーロッパの宗教モニュメントに関するアーカイブズの構築と  
世界遺産オーセンティシティの再考」(研究代表者:坂野正則)

【開催方法】会場(定員50名)+Zoomウェビナーによる配信

【参加方法】事前申込制 受付締切日:5/31(日)

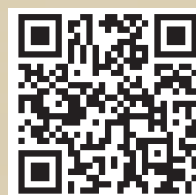
下記URLまたはQRコードよりお申し込みください ※電話での申込受付不可  
<https://forms.office.com/r/C0WxwPFEHg>

【聴講料】一般1,000円 学生800円 ※銀行振込/詳細は受付後に別途案内

最新情報は研究所HPにてお知らせいたします

2026年  
6/14日

上智大学9号館  
地下1階  
9-057C教室



第53回（2026年）連続講演会 6月14日（日）

# 巡礼の比較史

## ——〈歩く〉経験と宗教——

近年、さまざまな学問の領域で、「歩く」経験とその精神、社会、文化などへの影響が注目を集めている。かつて座学を基盤にしていた人文系の学問にも、多くフィールドワークが採り入れられるようになり、地域の環境や歴史を探るイベントでは、まち歩き体験がたくさんの参加者を集めている。人びとは、「歩く」経験を通じてあたらしい何かを発見し、そしてともに「歩く」仲間との繋がりを深めているように見える。

すでに1980年代、考古学者の西田正規は、列島社会の各期に大きな流動性を見出し、移動から定住に至る単純な進歩史観に疑問を呈した。2013年には、国立民族学博物館の共同研究から〈ホモ・モビリティ〉論が提起され、ヒトが現状へと進化した前提には移動があったこと、移動こそがヒトが「ヒトである」ことの本質であるとの提言がなされた。有史以来、ヒトは移動を繰り返し、現代に至るまで、その規模と速度は拡大を続けてきた。結果、わたしたちの日常のモビリティは、多く便利な機械に頼ることになったが、それでもヒトは、自分の身体で歩くことを望み、歩くことを止めてはいない。

移動すること、「歩く」ことが人間の社会・文化の中核にあるのなら、宗教との関わりはどうだろうか。わたしたちは、キリスト教や仏教、儒教、イスラーム教などの祖師たちが、長く苦しい彷徨の時代を経験したことを知っているし、それを追体験するかのような巡礼の文化が、世界各地に展開して来たことも知っている。その伝統は、未だに強く世界中の人びとを惹きつけており、現代日本では、ドラマやアニメの「聖地」を訪ねる新たな「巡礼」の形も流行している。

今年度の連続講演会では、それぞれの時代・地域の巡礼を問い続ける専門家を招き、そもそもの「歩く」経験が巡礼に占める意義や、巡礼を成り立たせる仕組み・文化を比較し、その多様性や核となる部分を紐解いてゆきたい。